

〔課題演習抄録〕

中学校英語科における指導過程の研究 - 「第二言語習得の認知プロセス」に着目して -

阿 南 翔 平

Shohei ANAN

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：第二言語習得の認知プロセス，PCPP，単元，パフォーマンス課題，ルーブリック評価

1 研究の目的

文部科学省(2015)は、高校3年生を対象とした英語力調査の結果をもとに、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能全てにおいて課題があると述べている。この問題意識を共有し、中学校卒業段階で英語検定3級程度の英語力を身に付けることを念頭に置きつつ研究を始めた。まず、Paivio(1971)の研究から、視覚教材を用いることで英語の定着を促すだろうという予想があった。単語レベルであれば、単語と絵を組み合わせることで授業を行うことで定着することが示唆された。しかし、これは単語レベルの話であり、文法等でも同じことが起こるとは考えにくかった。これらのことを踏まえ、本研究では、文章レベルまで対象を広げて、学習者が表現・理解・産出の能力を獲得することができる指導過程を明らかにすることを目的とする。

2 研究の計画

- (1) 先行研究の検討
- (2) 学習者の認知プロセスの検討
- (3) 指導過程の検討

3 研究の内容

(1) 先行研究の検討

「第二言語習得の認知プロセス」とは、村野井(2006)が提唱する言語学習のモデルである。

この言語学習のモデルにおいて、「気づき」、「理解」、「内在化」、「統合」といった認知のプロセスが学習者の中に連続で起こることで英語を産出することが述べられている。一方で、佐藤ら(2015)は、全てを英語で行うことを前提としている村野

井のプロセスは「英語での授業」にこだわりすぎると授業が無味乾燥になる可能性を示唆している。そこで必要に応じて限定的に日本語を用いる方が効果的とも述べている。

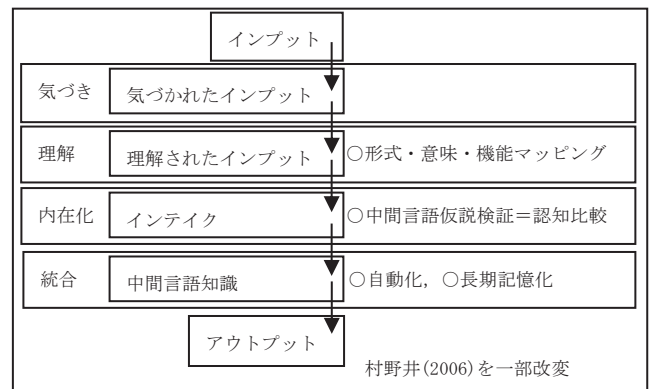


図1 第二言語習得の認知プロセス

(2) 学習者の認知プロセスの検討

村野井(2006)は、教科書を用いた内容中心の指導は、提示(presentation)、理解(comprehension)、練習(practice)、産出(production)のPCPPの流れで進めることで、第二言語習得の認知プロセスに沿ったものになっているとしている。また、村野井(2006)は英語をインプットする際に実際には「理解」の過程が存在し、それを指導過程に取り入れる重要性を示している。村野井(2006)の述べる「理解」の過程は伝統的なPPPには存在しない。ただし、村野井は「理解」を言語の側面からしか注目しておらず、学習者がどのような思考の基で「理解」に焦点を当てるかについては述べていない。

そこで、学習者の認知プロセスの実態については青山(2017)の6つの結束性を使用し、授業記録の発言を分類した。実際には、「No, David!」という絵本を使用し命令文の「理解」に焦点を当てた授業を分析した。本授業では結束性の「全体-部分」と「因果関係」に着目した。授業では、「Go to your room!」と言われたDavidが、次にどのよ

うな行動を取るかを学習者に尋ねた。その際、タオルの絵やスーパーマンの絵に焦点を当てさせると学習者はDavidが「ベッドの上でスーパーマンをするのではないか」と予想した。これは繰り返しDavidが怒られるという一連のストーリー性(全体)を手掛かりに次にDavidが行う行動(部分)を捉えていることを示している。更に「因果関係」を手掛かりにして未知の内容を予想するという認識の方法を取っていたこともわかった。

(3) 指導過程の検討

ここでは、学習者が単元内の各授業(PCPPの流れ)におけるルーブリックの共有を行いながら、パフォーマンス課題を単元最後に取り扱う指導過程を検討した。太田(2012)は、同類の学習内容を授業で2度、3度繰り返す必要性を述べている。つまり、学習者が英語を習得するには、単元内に登場する新出事項に繰り返し出会える授業構想となる必要がある。そこで、単元内の全ての授業において「産出」時に本単元以前及び本単元の既習事項を使用する機会を加えた。更に、学習したことを自己表現できるようにするためには、単元内の既習事項が有機的に結びつく課題が必要であると考へた。そこで西岡(2008)の述べる「パフォーマンス課題」を単元最後に取り入れた。加えて、学習者が単元内の見通しがもてるよう各授業のルーブリックを配布し、評価基準を共有した。

その結果、パフォーマンス課題において本単元の既習事項を使用した学習者は33人中23人(69.7%)であった。この内の表現が流暢な学習者に共通することは本単元における既習事項を多用せず、部分的に使用していたことである。その他の学習者は既習事項を多用していたが、それは教師の指導言の影響であると考へる。一方で、本単元における既習事項を使用しなかった残りの10人も表現が流暢な学習者と表現が困難な学習者に分けられた。表現が流暢な学習者(5人)は新出事項を使用せずに、意味のある文章を作成するために未習の内容を教師に質問して使用していた。表現が困難な学習者は教師に質問することがなく、本単元以前の既習事項だけで文章を書くという特徴が見られた。

4 成果と課題

(1) 学習者の認知プロセスの検討における成果

実践の結果、PCPPの授業構成、パフォーマンス課題の設定によって学習者は既習事項を使って英語を表現することが示唆される。ゆえに村野井

(2006)の「第二言語習得の認知プロセス」には可能性があると考へる。加えて、学習者の認知プロセスの検討からも適切な指導言を用いることで言語の側面以外から「形式・意味・機能マッピング」が起き、学習者の理解が促されることが示唆された。また、パフォーマンス課題を工夫し、PCPPの流れで授業を行えば単元末では英語による思考が促される可能性もある。

(2) 指導過程の検討における成果

パフォーマンス課題の結果から本単元の内容を使用した学習者は69.7%であった。しかし、残りの学習者の中には意図的に使用しなかった学習者がいたことも考へられる。ゆえに、単元内外の授業が有機的に結びつくパフォーマンス課題は有効であると示唆される。加えて、ルーブリックにおける振り返りでは「日本の伝統文化を中心に学習して、新出事項だけでなく、日本の文化についても改めて気付いた」、「新出事項を学習して、その文を紹介時に使うことができた」といったパフォーマンス課題を超えて、学習者が英語を使って何かをしようとする姿が見られた。

(3) 単元実践における課題

ルーブリックの使用について課題が見られた。学習者の中には単元を俯瞰する者がいた一方で、ルーブリックを意識していない者もいる。ルーブリックを意識していない学習者が必ずしもこれまでの単元内外の既習事項を結びつけて使うということはできなかった。課題克服のためには、授業の始めか終わりに振り返りを共有する時間を設ける必要がある。今後は単元内の各授業の結びつきだけでなく、年間計画における各単元の結びつきについても追究していきたい。

主な引用・参考文献

- 青山之典 2017 説明的文章の難易度を決める要因
(1)-マクロとミクロの視点から捉えられる構造に焦点をあてて- 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報第7号
- 文部科学省 2015 平成26年度 英語教育改善のための英語力調査事業報告
- 村野井仁 2006 第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法 大修館書店
- 西岡加名恵 2008 「逆向き設計」で確かな学力を保障する 明治図書
- 太田洋 2012 英語の授業が変わる 50のポイント 光村図書
- Paivio, A. 1971 Imagery and verbal processes. New York: Holt, Rinehart, and Winston
- 佐藤臨太郎・笠原究・古賀功 2015 日本人学習者に合った効果的英語教授法入-EFL環境での英語習得の理論と実践- 明治図書